

『四谷怪談』余話

大塚喜子

親父橋で雇った猪牙舟を、駒形堂横で降りた。船頭の喜八に待つように言うと、「へい」と気持ちの良い返事が返ってきた。鶴屋南北は雷門をくぐり、観音様と三社権現に賽銭を投げ、茶店で足を止めた。

「マアひとつおくれかね」

「はい、はい、お渴きですね」年増の色っぽい女将が愛想よく挨拶する。茶を啜る南北の前を、大勢の参詣客が通り過ぎる。箱根の手前の大山から来た物売りの口上に大勢が足を止めて聞き入っている。

隣の赤毛氈に、上方から来た勤番侍二人が、齒切れのいい難波言葉で江戸の浪人達を揶揄っている。それを、口をあけて見ている浪人がいたりする。

菰を被った乞食が寝ころんでいる横を、芸者を連れた贅沢な身なりの商人が石段を上がつていく。

1

学堂の向こうから喚き声が聞こえる。振り向くと、ボロを着た非人二人と、この寺の坊主が、老いさらばえた浪人者を罵りながら、小突いている。見かねた南北が女将を呼んで、一朱金三枚を手渡し、連中を仲裁するように頼んだ。

「おやマア、お人助けでござんすね！あの者は粒六とメタ吉といって、境内で巣くつている厄介者ですよ」女将は胸を叩いて請け合うと、駒下駄を鳴らして駆けていった。話は直ぐについたらしく、粒六とメタ吉は、金を押し頂き、ペコペコ頭を下げながら姿を消した。後に残った浪人は、女将に礼を述べると、ヨロヨロ観音堂の裏へ消えた。

「騒ぎの元はなんでした」戻ってきた女将に南北は聞いた。

「はい、あの浪人が五重の塔の裏で一文、二文の物乞いをしているのを、『縄張り荒し』だと言って粒六とメタ吉が頭の所へ引きずっていかうとしていましたのさ」

「それは危ないところだった」

「お武家様やご浪人様の差している刀は竹光と侮っているんでしようね、誰もが平気でお待ちさんに食ってかかるんだから。文政になって世の中はガラツと変わりましたね」「まったくくだ。文化の頃は今ほどせちがらくなかったね。あの頃はのんびりした風儀があつたね」

「……、変わらないのは境内の茶店がいつも、賑わっていることぐらいですよ」口には手をあてて、笑う女将の顔を見て南北は思わず膝を叩いた。

「ウン。出来たぞ！」

「え、いったい何が？」

「なに、こつちのことだ。南北は財布から心づけを取り出し、女将の手に握らせた。「あれ、こんなに頂いて……旦那さま……」呆気に取られている女将をしり目に「さつきの礼だヨ……」と言ひ、足早に歩きだした。

忘れないうちに早くこの場を書き留めたい。駒形堂に戻って、待たせてあつた猪牙舟に乗り込んだ。船頭の喜八が

「今度は何方に行きましようか」というのに返事もせず、矢立を引き抜いて覚え帳に筆を走らせた。表には菊五郎と打ち合わせた狂言の筋書きが、次のように記してある。

（高野師直が藩主をつとめる高野家再興の時の話である。塩治判官は主家の高野師直に齒向かつた。故に判官は切腹に処せられ、高野家はお取りつぶしになった。塩治家の浪人、民谷伊右衛門は、女房お岩を実家に戻し、お家の再興を図る。伊右衛門は塩治家同士の裏切りでだんだんに追い詰められている。実家に戻つたお岩は夫の無事と塩治家の再興を願っている。）

序幕・・・浅草観音境内学堂横の茶店。舞台中央は音羽屋の紋の付いた大提灯。上手には楊枝の店、ここでお岩の妹お袖が楊枝を商っている。傍らに塩屋家浪人が菰を被り寝ている。茶を汲んでいる女将は忙しく客をあしらっている。

伊右衛門

「マア一つおくれかえ」

茶屋の女将お滝

「ハイハイ。だいぶお渴きなされましたね」南北はここ迄一気に書くと、筆を止めてニンマリ笑つた。

江戸一番の賑わいの浅草寺境内でこの地獄狂言の幕が開けば、菊五郎も文句は言わないだろう。早速に観音様のご利益があつたというものだ。

浅草を序幕にするなら、続く二場の伊右衛門宅の場を鬼子母神裏では遠すぎる。……はて何処にしよう。浅草から遠くないと言えば昔処刑場があつた山谷堀の砂場がいい。舞台の組み立てはこれでピタリと決まつた。

「待たせたね。深川へ回していおくれ」喜八に言ふと、南北は矢立を帯に差し込んだ。この後は家に帰って弟子たちに書かせるだけだ。猪牙舟は船頭の一突きでゆっくり大川へ乗り出した。

南北は四人いる内弟子の一人を連れて、昨日、書き留めた筋書きを検めようと左衛門町のお岩稻荷に来た。黒船にある南北の家から距離がある。足腰には自信があるが

流石にきつい。永代橋を渡ったところで辻籠に乗った。広い甲州街道から狭い左門町の木戸門に入ると、辺りは、將軍外出の折に先払いを勤める、与力の屋敷が並んでいる。風に煽られるお岩稲荷の赤い旗を見て、弟子が言った

「師匠、なにやら、薄気味が悪いですね」

「そうかい。江戸には何処にでもある同心町だよ」

「今し方迄は、晴れて、いい天気だったのに、この筋に入った途端に、どんより曇ってじめじめした風が吹いてきたじゃありませんか」

「前に来た時も不思議とこんな感じだったよ」

旅人や馬や籠が行きかう甲州街道からこの横丁へ入ると、人っ子一人見えない。南北と弟子は襟元を搔き合わせて、朱塗りの鳥居をくぐった。

「ちゃんと、お手水を使つて口を漱がなくては駄目だよ」弟子に参拝の作法を教え、南北はがま口を鳴らして賽銭を投げた。

お岩の恨みで祟り殺された民谷伊右衛門の屋敷はこの辺りにあった。貞享元年の出来ごとだから、およそ百四十年も前の事だ。赤穂浪士の討ち入りよりも更に十八年前である。二人は社殿の階段を登つて、ご神体が祀られた内殿へ入った。正面奥のご神体は民谷岩さまである。四方を閉め切られた本殿は昼だというのに暗い。二礼二拍手一礼して両手を合わせ、灯明台に向かつて祈った。

「お岩の命様、どうか新作狂言『東海道四谷怪談』が大当たりしますようにお願い申し上げます。決してお岩様を悪女には書きませぬ。欲に目がくらんだ夫に裏切られた、悲しい、美しい心根の女に描きます。この鶴屋南北の極めつけ狂言になるようにお力添えをお願いします」

南北が心を込めて線香を立てると、風も無いのに真ん中の一本だけが消えた。お岩様が大当たりを請け合ってくれた。此れは吉兆だと思い、南北は再び深々と頭を下げた。

「音羽屋さん悪い事は言わないから、お岩稲荷にお参りに行きなすつたらどうですか」中村座の二階の大部屋で本読みがあった時に南北は菊五郎に薦めた。

「馬鹿言うねえ。俺は板の上で幽霊や化け物をやっても、大入り祈願の天神様の外には、神頼みしたことがねえのが自慢だ。なあ成田屋」

脇で台詞の筋書きに目を落としている七代目団十郎に、水を向けた。お岩の亭主、民谷伊右衛門を演じる団十郎は、声をかけられても知らぬ顔で役の工夫に入っていた。

五年ほど前に、市川宗家十八番の『助六』を、菊五郎が『助六廓の菊』と銘うって、誰の断りもなく演じてから、菊五郎と団十郎には確執があった。岩井半四郎が仲裁に

入ったが、二人が本心から手打ちをしていないのは誰の目にも明らかだった。菊五郎は舌打ちすると、今度は幸四郎に矛先を向けた。

「高麗屋はどうでえ。厄除けに、わざわざ四谷に行くことはねえとおもわないかい」
成田屋の大目玉、菊五郎の美貌、高麗屋の美鼻といわれ、鼻高幸四郎と異名をとる五代目松本幸四郎は、人柄の良さ其のままに、素直な目で菊五郎を見た。

「そう言われると困るが、お岩稲荷には五日前にお参りにいつてきました」

一座の面々を見回した菊五郎は、お岩の妹、お袖役の岩井糸三郎に目を向けた

「おい、糸さん。おめえは、座頭の俺に無断で四谷なんぞに行つてねえだろうな」

「いえ、それが、成田屋のお兄さんに誘われて、あつしも一緒に参りました」ともじもじしながら答えた。

「なんだい。そうなるとお岩役をやる肝心要が、お岩稲荷に行つてねえだけで、後は一人残らずお参りしたわけか。ようし、こうなると俺は意地でも、金輪際、四谷稲荷には足をむけねえからナ」すつかり、音羽屋の機嫌を損じてしまったようだ。南北は頭を抱えて作者部屋へ戻ると弟子が

「師匠は既に災難にあつてますよ。猪牙舟が永代橋にぶつけて右目の上をひどく腫らしたじゃありませんか。お岩も伊右衛門から飲まされた毒で、目の上を晴らしますよね」

背筋が震える思いで南北が「東海道四谷怪談」の台帳を見ていると更に弟子が言つた。

「いい事思いついたんですがね。芝居櫓、火の見櫓、五重塔に役者衆の絵舩を引っ掛けてみませんか。江戸中の評判になりませんか」弟子は得意げに鼻の頭を擦った。

南北はしばらく思案の末に

「たしかに人の目を引くだろうね」

「……でしよつ」

「ヨシやつてくれ。無断でやると面倒なことになるから、夫々に金をたっぷり渡して、舩を上げてくれヨ」

初日の一ヶ月前から中村座の櫓を始め、浅草寺の金堂、江戸のあちこちの火の見櫓に吊り下げられた不気味な血染めのお岩の舩は大評判になった。

『四谷怪談』はこれで大当たりですよ」座元も南北を褒めそやした。

新作『四谷怪談』は、初日の朝の一番太鼓が打たれると同時に、客が木戸を壊す勢いで押しかけた。そして二幕目山谷堀の砂場が開くと、それ迄騒めていた客がピタリと静まった。

伊右衛門から毒を盛られたお岩が、母の形見の櫛で髪を梳くたびに、目から血がし

たたり落ちる………棧敷の女客が悲鳴をあげ、子供が引きつけをおこす騒ぎになった。

初日の幕が降りると菊五郎が作者部屋にやって来て

「今度の狂言は、派手好きな江戸の客には受けないと思つたが、これは怪談狂言の極めつけだ」上機嫌で世辞を述べ立て、引き揚げた。その後ろ姿を見送りながら弟子が「あつしは音羽屋の菊五郎って役者は嫌いですね。廊下で挨拶してもソツポを向くんですよ。会釈して、肩まで叩いてくれる成田屋や高麗さんとは大違いだ」

「お前さん達、そんなことを言つてはいけないよ。団十郎や幸四郎は代々続く歌舞伎役者の名門の家に生まれた御曹司だ。ひきかえ菊五郎は建具職人の倅だ。目鼻立ちが奇麗だからといわれて、先代菊五郎の高弟の尾上松助の養子になるも、松助が芸に迷つて自死した後は、後ろ盾がないのに、見ての通りのトントン拍子の人気と出世だ。言わば成り上がりだ。こればかりは仕方がないんだよ」南北のしみじみした口調に弟子たちは納得した。

おわり